



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.39 (2011.1.31)



情セ・語セ施設連携「一般情報処理A」開講

2009年度夏季休暇中、語学センターと同時期に情報処理センターで機器更新が行われ、実習室が1つ減った事により、一般情報処理の授業の一部が今年度から語学センター教室で開講されています。国際学部関連、外国語関連の授業以外では初の開講です。

今回はその『一般情報処理A』をご担当の情報科学研究科、寺内衛准教授に「リテラシー教育」についての熱い思いをお寄せいただきました。

目次：
語学センターでの“リテラシー”教育
情報科学研究科 寺内先生・・・1
ミニコラム：国際学部 飯島典子先生・・・2
CALL 機能紹介③・・・2
ピエロ・デルラ・フランチェスカの探究・・・3
知のトライアスロン 映画上映会・・・4
市大英語 eラーニング閉講式・・・4

語学センターでの“リテラシー”教育

情報科学研究科准教授 寺内 衛



◆404教室にて、寺内先生

本学では、“リテラシー”教育の一環として、国際学部生・芸術学部生向けには『一般情報処理A』が、情報科学研究科生向けには『一般情報処理B』が一年次の必修科目としてそれぞれ配置されている。この

うち、国際学部一年次生向け『一般情報処理A』は、今年度から語学センターの教室をお借りして開講することになった。情報所属の教員が語学センターで正規の授業を行なうのは初めてとの理由でこの紙幅をいただけなので、今回は自らの考える“リテラシー”教育についてその理念を述べさせていただこうと思う。

comprising the arts, humanities, natural sciences, and social sciences, as opposed to professional or technical subjects. / 2. (during the Middle Ages) studies comprising the quadrivium and trivium, including arithmetic, geometry, astronomy, music, grammar, rhetoric, and logic. [1745-55; trans. of L artes liberales works befitting a free man]

ここで、算術・幾何→数学、天文→自然科学、音楽→芸術、文法・修辞学・論理学→情報発信能力という明確な対応に気付けば、本学の全学共通系科目が“リテラシー”教育に対応していることは明白であろう。このうち『一般情報処理A』は、情報処理機器及び情報通信ネットワークの活用を通じての情報収集能力及び情報発信能力の涵養を担っている。

“literacy”とはもちろん“literate”から派生した語であるが、literateを英英辞典(Random House Webster’s Unabridged Dictionary, 1999)で検索すると、

1. able to read and write. / 2. having or showing knowledge of literature, writing, etc. / 3. characterized by skill, lucidity, polish, or the like. / 4. having knowledge or skill in a specified field. / 5. having an education; educated. / 6. a person who can read and write. / 7. a learned person. [1400-50; late ME < L literatus, litteratus learned, scholarly. See LETTER, -ATE]

とある。原義的には“literate”=“learned”なのだが、一体何を“学んだ”状態のことを“literate”と呼ぶのだろうか？

筆者自身は、“liberal arts”（“教養”）を修めた状態を“literate”であると考えている。“liberal arts”は以下のように定義される：

1. the academic course of instruction at a college intended to provide general knowledge and

“教養”=『“自由人”に相応しいもの』という定義は、『権威に依拠することなく、ものごとを自らの責任において判断できる人こそが“教養”を有している人である』という考え方に基づいている。大学卒業後の長い人生において遭遇するであろう様々なことがらを想うと、ものごとを自らの責任において判断するためには、“特定の分野のみに偏ることのない広範な素養”を身に付けておくことが如何に重要であるかは火を見るよりも明らかだ。もちろん、広範な素養の獲得のためには母語以外の語学の習得も欠かせない。本学の語学センターのfacilityを最大限に活用すれば、語学習得と素養獲得とが同時に行なえるはずである。語学センターという適切な場を得て、筆者の担当する『一般情報処理A』は、よりその理念に近づいたものと考えている。

☆ 英語の習得に有益であると筆者が考えているいくつかのホームページを以下にまとめた（これらは『一般情報処理A』の中で紹介しているものである）：

http://www.fdev.info.hiroshima-cu.ac.jp/~terauchi/Useful_URLs.htm

ミニコラム 外国語に想う【34】

「語学の着こなし」

国際学部 准教授
飯島 典子



飯島先生：研究室にて

語学のセンスはファッションのそれにも通じる所がある。個人のスタイルを貫くのは勿論結構なことだが、ほんの少し流行を取り入れて「時代の気分」を反映することによって却ってその人の人となり際立つこともあるからである。「若い世代は環境問題に敏感」と言う時も「80年代生まれ（80后 前の世代に比べて経済的な豊かさを享受している）は地球温暖化（全球変暖）に敏感で黄砂（沙塵暴）の被害を憂えている」とする方がよりスタイリッシュなのである。

一方語学の古着（古典）も無視できない。最新流行を追いかけるだけではファッションの達人とは見なされないのと同じである。まだ筆者が博士課程在学中だった頃、ある研究会の会合で、女子大の先生をしていた中国人の先輩から、女子大と共学校との単位「相互乗り入れ」をどう思うか、訊かれたことがあった。女子大の学

生も社会に出た後の事を考えると男子学生と共に勉強するのも大いに結構です、とは言ったものの、それだけでは流石に芸がないと思ひ、最後に「男性は天の半分ですから（原文は毛沢東の名言「女性は天の半分を戴く 女人戴了半边天」男尊女卑の思想が支配的だった第二次世界大戦直後の中国としては極めて画期的な発言であった）」と付け加えた。彼女がその時どのような表情をしたかは読者の想像にお任せするが、その後数ヶ月して、突然その先輩から彼女の勤め先で非常勤として中国語を教えないかとの打診を頂き、期せずして大学教員としてのスタートを切ることが出来たのである。

外国語は大事だ、古今東西の名言は役に立つのだと頭で分かっている、それをパロディ化できるまで自家薬籠中のものにすれば本当にツカえるのだ、という実感を持ったのは筆者もこの時が初めてであった。

語学センター教室の機能紹介③

カンタン！教室録画

語学センター 403A 教室と 404 教室には教室録画機能があります。この機能を使えばビデオカメラセッティングなしで、教室の様子をいつでもとても簡単に撮影することができます。

教室内の前と後ろの天井部分には2台の撮影用ハイビジョンカメラがありますが、カメラアングルは教卓の操作パネルに何種類かプリセットされている中からボタンで選択するだけです。手動でズームなどがしたい場合には別リモコンで調整もできます。

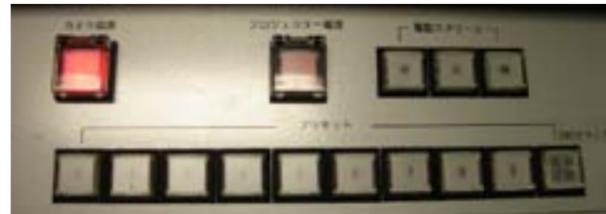
録画は Windows XP のワークステーション上で、録画ソフトウェアを使って行います。これも操作はとても簡単で、録画開始ボタンと停止ボタンのクリックだけです。停止してすぐに同じソフト上で再生もできます。

録画すると高解像度の avi ファイルがワークステーションに保存されます。1 時間で約 50GB ととても重いファイルですが、教室内の映像提示用スクリーンに投影した時に、ホワイトボードの文字まではっきりと見ることができます。

ただ、このように重いファイルは Web 配信のような用途には不向きなので、その場合は別ソフトでファイル変換する必要があります。語学センターでは、Windows OS に付属のムービーメーカーで、容量が軽く

Web 配信もできる wmv ファイルに変換していますが、こちらにも追加した avi ファイルを「ムービー保存のウィザード」に従って保存するだけでできあがります。

授業では教科教育法などで頻りに教室録画がされていますが、映画上映会の講演（p4 参照）の録画のような利用も今後増えていくことでしょう。



◆カメラ操作パネル。電源スイッチを入れて、プリセットされたカメラアングル・画面数の中からボタンで選択する。



◆ワークステーションでの録画用ソフトウェア起動時画面。下の赤い録画ボタンをクリックするだけで撮影開始になる。

イタリア美術巡礼（1）

ピエロ・デルラ・フランチェスカの探究

僕は昨年末、半月のイタリア・ルネサンス美術研修の旅を伴にしました。旅の楽しみは3度ある、旅行前、旅のさなか、旅のあと、とあります。現在はこの「旅のあと」を楽しむ時であるわけですが、正直、いまだに五里霧中というのが実感で、架蔵の画集を眺めていても本当にこの名品を「見た」と力強くは言明できない状態、クリアな感想を明確に述べる境地には遠いのです。

ウフィツィ美術館（フィレンツェ）、レオナルド《最後の晩餐》（ミラノ）、ジョットのスクロヴェニ礼拝堂（パドヴァ）、それにボルゲーゼ美術館（ローマ）ももう予約なしには拝観しづらい状況になっているようです。今回ラヴェンナ、オルヴィエート、パヴィアなどに行けたのはありがたかった。そして、アレツォ、サンセポルクロも訪問地に入っていたのは明らかに、ピエロ・デルラ・フランチェスカを見るためです。

「パドヴァなんて普通じゃ行きません。普通はヴェローナです」とベテラン添乗員氏が言う。そう、ロミオとジュリエットの町。でもピサネロの名画があり、ダンテゆかりの広場、アリーナのある古都でもあるが、そしてカステルヴェッキオの美術館、さらにサン・ゼーノ教会のロマネスク門扉レリーフ、見るべきものの奥は深い。

いまヴェローナの魅力についてこれ以上深入りしませんが、イタリアを構成するあまたの都市がそれぞれの違う魅力を持つことにおいてイタリアは尋常ではないんだと言えます。イタリアがのっぺらぼうに均質な一つのイタリアになることはない。どだい、イタリアにイタリア人はいないといえます。いるのはミラノ人、フィレンツェ人、…多様な都市国家住民です。

芸術、文化、そして民族性において「イタリアは二つある」と記すのは美術史学者アンリ・フォションの『ピエロ・デルラ・フランチェスカ』原章二訳、白水社。次の二つです。

（1）静謐、古典的秩序、堅固、壮麗、構築的。
（2）情熱的、あけっぴろげ、夢見がち、芝居風。

現代の日常心理にも現れるこの二面性は美術領域で

は次のように表現されるといいます。

- （1）建築的でモニュメンタル。古典主義。
- （2）ロマンティックで表情豊か。バロック的。

ピエロ・デルラ・フランチェスカは、偉大なジョットや堂々たる威厳のマザッチョと同じく（1）の系譜上に不動の位置を占める「構築者」なのです。

近い時代で（1）の性格を端的に政治的に、そして言うならば“観光的”に悪例として示しているのが



《キリスト復活》部分



《聖ユリアヌス》部分

ローマ・ヴェネツィア広場に向うV・エマヌエーレ2世記念堂でしょう。空疎になりかねない。

ブレラで最高の名品《モンテフェルトロ祭壇画》を、ウフィツィで《ウルビーノ公夫妻二連肖像画》を見たあと、アレツォのサン・フランチェスコ聖堂、サンセポルクロ市立美術館を訪れた僕はもうこれだけでピエ

ロ・デルラ・フランチェスカを語りうる体験をつんだ。ピエロ信奉者になっていい。

ここではサンセポルクロで買い求めた2枚の絵葉書を図版紹介し、感想をとどめておきたい。左は『森のキリスト、ほとんど愚鈍な』とロンギ*は言い、『田舎の神』とクラーク**は形容した（石鍋***）顔であるが、きっと身近な人の顔に即して探究した初々しさがある。右は1954年12月に発見され、67年秋の「別冊みづゑ」に登場し、近年西洋美術館で展示もされた聖人像。僕にはいつも、宇宙と交信する、別の惑星からやってきた美青年に思えて仕方がない。そして彼は地球の現在を憂慮しているのだが。

有元利夫は《アダムの死》の若い女性の像に「あっ、これは仏画じゃないか」と思ったそう（石鍋 p. 370）。共感はある。が、僕の感受性ではその若い女性像にこそ現代に通じる若い画学生の、真正の人間のフォルムを求めて健闘している試行錯誤の探究心がうかがわれ、「仏画じゃないか」と直截に思わせるのは同じ「聖十字架伝説」中の「聖木の礼拝」中央でひざまづくシバの女王のモノクロの横顔である（前掲フォション p. 141 参照）。

[* ロベルト・ロンギ、** ケネス・クラーク、*** 石鍋真澄。いずれもピエロ研究基礎文献の著者。]

いちだい知のトライアスロン “クリスマス・新年” 映画上映会開催

今年で2回目となる、知のトライアスロンの映画上映会が12月と1月に下記の日程で語学センターで開催されました。今回は、国際学部のルディムナ先生と佐藤先生に映画をセレクトしていただき、フランス映画と日本映画を3本ずつ上映しました。

上映会日程：

①ルディムナ先生（国際）セレクト

12/20（月）、12/21（火）、12/22（水）

『美女と野獣』 『幸せになるための恋のレシピ』

『ベルサイユの子』

* 12/20には、ルディムナ先生による『美女と野獣』のご講演！



ルディムナ先生
講演：「光と影」

②佐藤先生（国際）セレクト

1/12（水）、1/13（木）、1/14（金）

『宗方姉妹』 『ゆれる』 『クヒオ大佐』

* 1/12には、佐藤先生による『宗方姉妹』のご講演！



佐藤先生
講演：「追悼高峰秀子
～『宗方姉妹』を読む～」

また、お二人の先生による、映画のご講演も実現！参加者の学生からは、講演を聞いたことにより、映画の中で表現されている「光の使い方」や、「人物の対照」などを深く知ることができ、より楽しむことができたという感想を聞くことができました。6日間という短い日程での上映会でしたが、参加人数は延べ約50名となり、これまでの上映会の中でも、昨年度の新入生歓迎上映会に次ぐ盛況ぶりでした。上映会に参加をしてくれた、学生のみなさん、教職員のみなさん、ありがとうございます。

来年度は、さらに内容をパワーアップさせて、上映会を行う予定です。引き続き、「いちだい知のトライアスロン」映画上映会をお楽しみに！

市大英語 eラーニング講座 閉講式



国際学部・渡辺准教授から
修了認定証を受ける受講者

「市大英語 eラーニング講座」（第2期）の閉講式が1月23日（日）、語学センター403A教室で行われました。平成22年に「市大英語 eラーニング講座」がスタートし、語学センターでの式は開講式・閉講式あわせて今回で4回目です。平成22年10月から約2ヶ月間の集中学習をした市民の受講生のうち修了認定証を25名に、また成績優秀者11名には表彰状があわせて贈られました。

渡辺准教授がひとりひとりに修了認定証を手渡し、「講座はこれで終わりですがこれからも生きた英語に触れ、続けて学習をしてほしいです」と思いを語りました。

この講座は平成19年～21年まで実施した「社会人の学び直し英語 eラーニング講座」とほぼ同様の講座です。本学国際学部の教員が開発した「ネットワーク型集中英語学習システム」を利用し、指定された学習時間の中で、各受講者の都合のよい時間に5つの公民館等に設置してあるパソコンで英語学習を行うことができます。平成23年度は夏と秋頃に開講予定です。

視察報告

- 9月9日 進路指導教員対象大学説明会 8名
- 9月17日 安芸高田市立高田中学校 101名
- 9月27日 島根県私立開星高校 21名
- 10月14日 呉宮原高校 PTA 44名
- 10月28日 呉市立呉学校 38名



発行日	2011年1月31日
発行	広島市立大学語学センター 〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1
編集	堀本真由美 伊達美和子（内線：6410）
Phone	(082)830-1509
Fax	(082)830-1794
E-mail	lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
ホームページ	http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html

